村では、十五歳になると、もう一人前の農民としてあつかわれるようになります。吉十郎も、十五歳になるころには、自分の勉強だけでなく、父をたすけて、百姓仕事も、だんだん身についてきました。

正月のある日、吉十郎の家に、村の人たちが集ってきました。村では、毎年寄合を開いて、村の係や約束をきめたり、年貢のこと、堤防つくりのことなどいろいろ相談してきめてきました。相談がほぼまとまったころ、帰りかける村の人をおさえて、吉十郎の父が、こう言いました。

「みなさん、今年から、私の代わりとして、吉十郎に肝煎の職をつとめさせることになりました。お役所に、お願いをしてきたのですが、ようやく許しがきました。まだ若いので、みなさん、よろしくたのみます。」

父は、からだが弱かったのです。村の人たちは、話が突然のことなので、驚いたようすでしたが、